

やさしい日本語

佐藤 和之

① 今朝、五時四十五分ごろ、兵庫県の淡路島付近を中心に広い範囲で強い地震がありました。気象庁では、今後もしばらく余震が続くうえ、やや規模の大きな余震が起きるおそれもあるとして、地震の揺れて壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、余震に対して十分に注意してほしいと呼びかけています。

これは、一九九五年一月十七日に阪神・淡路大震災が起きたとき、テレビで放送されたニュースの原稿である。一度読んだり聞いたりしただけでは、内容を把握するのが難しいと感じるのではないだろうか。



震災翌日の神戸の様子

● 人に情報を伝えるためには、どのようなことが大事なのかを考える。
● 文章の全体と部分の関係や、具体的事例の役割などに注意して、筆者の主張を読み取る。



目標

8 阪神・淡路大震災 一九九五年一月十七日に、淡路島付近を震源として起きたマグニチュード七・三の地震。正確な発生時刻は、午前五時四十六分。

10 把握

2 地震
9 原稿

日本語に不慣れな外国人にとってはなおさらだった。日常会話ができる人でも、「余震」や「亀裂」といった言葉は聞き慣れない。地震のない国から来た人にいたっては、そもそも「地震」についての知識がないのである。実際、阪神・淡路大震災の被害にあった多くの外国人は、突然襲ってきた大きな揺れに驚き、恐れおののくしかなかった。近くの公園にかりうじて避難したものの、自分には理解しがたい日本語の情報しかなく、立ち尽くすばかりだったのだ。何が危険かを判断できず、家具の散乱する部屋に戻ってしまい、余震が続く中、助けを待ち続けた人さえもいた。

この出来事は、さまざまな国籍の人が暮らすようになった地域社会に、「緊急性の高い情報を、外国人にも日本人と同じように伝えるにはどうすればよいのか。」という、これまで考えてもみなかった大きな課題を与えることになった。

この課題に取り組むため、わたしたち言語研究者は、震災直後に研究会を設立した。解決の糸口を探るため、被災した外国人への聞き取り調査や震災時の報道の分析などから開始した。そもそも震災以前の日本社会では、外国人への情報提供は英語あるいは各国の言語で伝えるのがよいと考えられてきた。実際に普段の生活では、主に英語を中心とした外国語への翻訳によって情報が伝えられ、特に大きな問題も生じていなかった。

ところが、阪神・淡路大震災が起きたとき、テレビやラジオから流されたニュースや避難指示は日本語ばかりだった。大規模な災害下では、翻訳のための時間も人手も足りなかったのだ。情報が時々刻々と変わり、英語ですら翻訳が追いつかない。まして、被災地に住んでいる外国人の国籍はさまざままで、話している言語も多様なのである。結局、外国人への的確な支援が始まったのは、災害時の安全確保が特に重要とされる七十二時間を過ぎてからだだった。

20

15

10

5

12 糸口

18 時々刻々

3 被害

4 避難

5 立ち尽くす

14 翻訳

19 支援

このような実情を考慮し、大規模な災害下では、従来の翻訳による伝達は不可能だとわたしたちは判断した。そこで、発想を転換した。日本に住む外国人が共通して接している言語は、日本語である。日本語であれば、伝える側に翻訳の知識や技術は必要ない。日本語を、外国人にわかりやすく簡潔にして伝えることで、災害初期でも有効に情報提供ができるだろう、という考えに至ったのだ。

では、外国人にわかりやすい簡潔な日本語とは、具体的にはどのようなものだろうか。冒頭のニュース原稿(①)を見ながら、「こういう表現はどうか。」という代替案を考えてみてほしい。大切なのは、災害初期という混乱の中、日本語に不慣れた外国人に、外国語での支援態勢が整うまでの間を生き延びてもらおうという、状況・相手・目的を明確に意識することである。

まずは伝える情報を絞らなければならない。一回に伝える情報が多すぎると、かえって混乱を招くことになる。この状況で特に必要なのは、「何が起きたか。」や「生き延びるためには何をすべきか。」ということだ。このことについて伝えている情報を①から取り出してみよう。

続いて、表現をわかりやすく言い換える。例えば、「津波のおそれがあります。警戒してください。」と伝える場合、「津波」は言葉を知らない外国人がいるだろうから「とても高い波」に、「警戒する」は難しいかもしれないので「注意する」に、それぞれ言い換えるといった具合だ。ただし、語句を言い換えただけで十分かというと、そうではない。津波を知っている人なら、この情報を聞いただけでも、海から離れて高い所へ逃げよう、と判断できる。しかし、全く知らない人だと、津波の恐ろしさも、どう対応すべきなのかわからない。そこで、「とても高い波が来ます。危ないです。海から離れてください。」のように言い換える必要がある。つまり、被災者の取るべき行動を具体的に示す表現が求められるのだ。なお、「津波」や「避

1 従来

13 漢津波
13 漢警戒

難所」といった、災害時によく使われる語句は、外国人にも覚えてもらったほうがよい。そのため、「津波(とても高い波)」のように解説を添えて使うようにする。

最後に、「起きるおそれがある」や「通れないことはない」といったあいまいな表現、主語と述語が何回も出てくる文、三十拍を超える長い文は外国人にとって理解がたいということを考えなければならぬ。

以上を踏まえて、冒頭の①を言い換えた例が②である。自分が考えた案と比べてほしい。

② 今日 朝 五時四十五分、兵庫 大阪 などで、大きい 地震が ありました。余震、
後で 来る 地震に 注意して ください。地震で こわれた 建物に 注意して ください。
この後も 注意して ください。

①から②の文章に言い換えるときのルールは、次の五つに整理することができる。

- 1. 重要度が高い情報に絞る。
- 2. 難解な語句は言い換える。
- 3. 災害時によく使われる重要な語句には解説を添える。
- 4. あいまいな表現は避ける。
- 5. 複雑な文や長い文は、文の構造を簡単にする。

このようにして言い換えたものを、わたしたちの研究会は「やさしい日本語」と名づけた。「やさしい日本語」に使われる語彙は約二千語。日本語で友人と待ち合わせたり、自分の欲しいものを説明したりすることができる外国人なら、十分に理解できるレベルである。

3 あいまい

4 漢三十拍

4 拍 音声の長さの単位の一つ。日本語の場合、母音一つ、または、子音一つと母音一つによってきた音を一拍とする。なお、「きゃ・きゅ・きょ」などの拗音や「ん」「っ」「ー(長音)」も一拍として数える。
ひ・な・ん・じょ 四拍
が・っ・こ・う 四拍

「やさしい日本語」2005年 検証実験

- 日時 2005年10月23日 13:00~14:15
- 参加者 85名
- 国籍(13か国)
アメリカ・オーストラリア・韓国・タイ・中国・チリ・ドイツ・パラグアイ・ハンガリー・フランス・ベトナム・マレーシア・ルーマニア

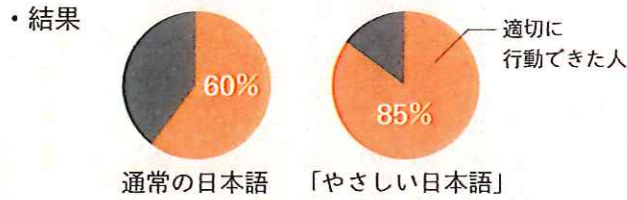


図 「やさしい日本語」で書いたポスター

二〇〇五年には、実際に使ったときの効果の検証も行った。世界十三か国からの留学生八十五名を、日本語能力が均等になるよう二つのグループに分け、同じ内容の指示を、一方は通常の日本語で、もう一方は「やさしい日本語」で行うという実験だ。放送と掲示物で三つずつの指示をしたところ、適切に行動できた人の割合は、通常の日本語グループが六パーセントだったのに対し、「やさしい日本語」グループは八十五パーセントだった。「やさしい日本語」のほうが、有効率が二十五パーセントも高かったことになる。この結果から、「やさしい日本語」は、いろいろな言語を話す外国人に情報を的確に伝えられることが確認できた。

研究とともに、その成果を役立てる取り組みも進めてきた。災害時に、行政やボランティアの人たちだけでも言い換えられるよう、語彙リストや言い換えのためのマニュアル、掲示物の実例集などを作り、配布した。また、ホームページからもダウンロードできるようにしている。

「やさしい日本語」は、外国人への情報提供は外

20

15

10

5

3 均等類



14 その成果を役立てる…… 「やさしい日本語」を用いた案内板の例。

もう一つ、わたしたちが考えなければならぬことがあった。実際に災害が起きたとき、「やさしい日本語」に言い換えた情報を外国人に届けるためには、どう伝えたらよいか、ということだ。わたしたちは、テレビやラジオなど音声で伝える媒体と、掲示物をはじめとする文字で伝える媒体とを想定し、それぞれに合わせた工夫点を考えてきた。

音声で伝える媒体の中で、被災者が最も頼りにするのはラジオ放送だ。しかし、読む速度が速かったり、言葉の区切り目がわかりづらかったりすると外国人は聞き取れない。実験したところ、一分当たり二百から二百五十拍で読むと理解しやすいことがわかった。普段のニュースは一分当たり四百四十から四百九十拍なので、約二倍の時間をかけて読むことになる。言葉の区切り目には、意味の切れ目ごとに短い間を取ると把握しやすくなるということもわかった。

文字で伝える媒体は、聞き逃すおそれがないという点で重要な情報源となる。ただ、災害時には掲示物が氾濫するので、読んでもらうためには、外国人に向けたものであることを知らせる必要がある。そこで、見出しだけでもいいから、外国語で表す。内容は、一枚の掲示物につき一つの情報とし、「やさしい日本語」で表す。表記には漢字も用いる。漢字を使う国の人という意味を推測できるし、避難場所や目印となる建物はほとんどが漢字で表記されているからだ。漢字を使わない国の人には、漢字を記号として認識してもらい、読み方は振り仮名で知らせるようにする。ローマ字はむしろ使わないほうがよい。竹を“take”と書く、英語の“take”と誤解されるおそれがあるためだ。表記以外にも、言葉の区切りごとに一字分空けて意味のまとまりをわかりやすくしたり、内容に関連する絵や地図を付けて情報を補ったりするという工夫ができる。これらを踏まえると、次ページの図のようなポスターになる。

わたしたちは、このように「やさしい日本語」とその伝え方の研究を進めてきた。そして、

20

15

10

5

11 漢 氾 濫
3 漢 媒 体

15 認識
14 推測

国語で、という固定観念から脱することを出発点に生まれた。日本語に不慣れた外国人を対象とし、災害時に彼らが安全に避難し、安心して過ごすための最低限の情報を提供することを目的に考えられた表現である。いってみれば、特別な表現だ。だが、その根底にある考え方は決して特別ではない。皆さんも情報を伝えるとき、誰に伝えるのか、相手の求めていることは何か、どう表現すると相手が理解してくれるのか、といったことを考えていると思う。相手が情報を理解し、活用できて初めて「情報が伝わった。」といえるのではないだろうか。

災害発生時は、的確な情報の伝達が多くの人を救い、被災者の心の負担を軽減する。だから、情報を伝える側は、誰に対しての情報なのか、伝えねばならない情報は何かをより強く自覚していなければならない。このことを肝に銘じながら、わたしたちは「やさしい日本語」の改良と実用化に向けた取り組みを続けている。



筆者 佐藤和之 一九五五（昭和三〇）—— 山形県出身。社会言語学者。
 著書 「方言主流社会——共生としての方言と標準語」、論文 「生活者としての外国人へ災害情報を伝えるとき——多言語か『やさしい日本語』か」など。
 出典 本書のための書きおろし。

10

1 固定観念
 9 肝に銘じる

肝がすわる
 肝をつぶす
 肝を冷やす

9 漢肝

広がる読書

「日本語と外国語」 鈴木孝夫



「日本語という外国語」

荒川洋平



【新出漢字】

41 援 エン

援助

42 津 ツ

津波

42 戒 カイ

戒律

43 拍 ヒョク

拍車

44 媒 バイ

媒介

44 濫 ラン

濫用

46 肝 カン

肝心

40 震 シン

身震い

40 稿 コウ

投稿

41 被 ヒ

被告

41 避 ヒ

避暑

41 尽 ジン

尽力

41 翻 ホン

翻意